

北前船と小樽の市街地の変遷

たかの ひろやす
高野 宏康

◆北前船と小樽

北前船は、江戸中期から明治期にかけて北海道と上方を往来した廻船で、船主が商品を購入して他地域で販売する買積みと呼ばれる経営形態によって莫大な利益を上げ、各地の産物の流通、文化の伝播や人の移動に大きな役割を果たした。

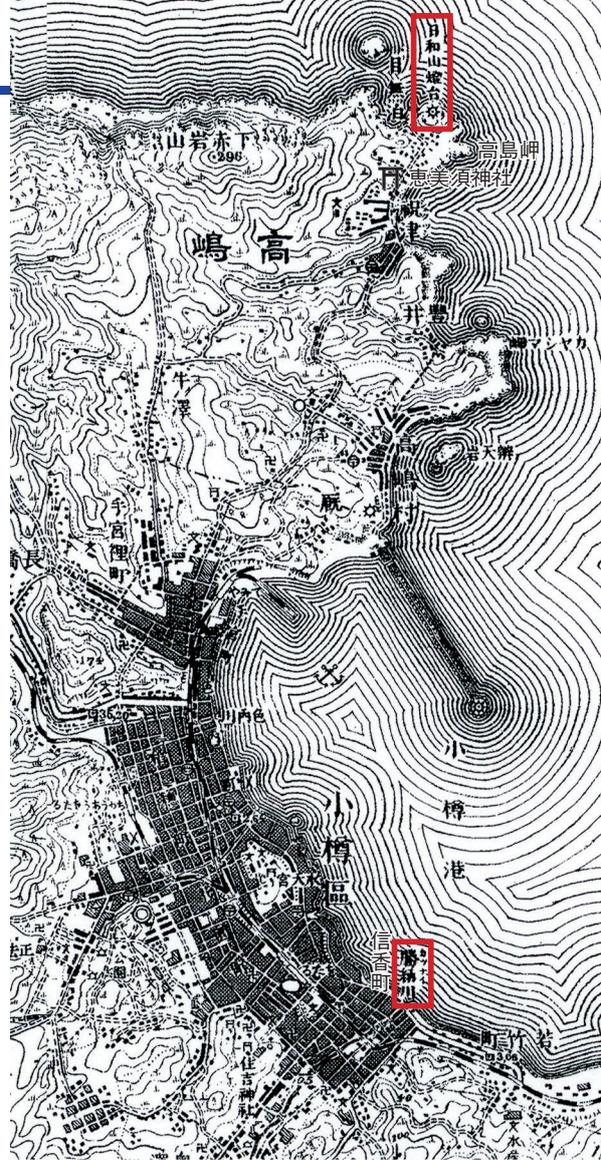
北前船の寄港地だった小樽では、北前船は人々の生活物資をもたらし、ニシンをはじめとする海産物を各地に運び、船主たちは倉庫群を建設するなど、小樽のまちの発展に深く関わっている。小樽にはいまでも様々な北前船遺産が残っており、平成30(2018)年には「北前船」日本遺産に認定された。本稿では、絵図・地図、写真から小樽の市街地の変遷と北前船の関わりを紹介してみたい。

◆小樽開港と北前船の来港

小樽港は、北海道西部、積丹半島の東側、石狩湾に弓状に面する海岸線に位置し、北・西・南の三方が山に囲まれた天然の良港となっている。

小樽という地名は、アイヌ語で「オタル・ナイ」(砂浜の中の川の意味)と呼ばれていたことに由来するといわれる。江戸中期、魚肥としてニシンの需要が高まると、ニシン漁に従事する人々が増加し、東からオタルナイ場所、タカシマ場所、オショロ場所が設置され、各場所を請負った商人が場所を経営していた。

江戸時代、北前船は、江差、福山(松前)、箱館の三つの港のいずれかに寄港し、沖ノ口役所で検査を受けて納税するという制度になっていた。特別な許可を得ない限り、他港への出入りは禁止されていたが、明治になると大きな変化を迎えた。明治2(1869)年7月、開拓使が設置されると、同年8月15日には蝦夷地が北海道に改称し、同時に小樽郡が設置された。同年9月に場所請負制が廃止され、自由に漁場経営ができるようになった。沖ノ口役所も廃止となり、12月には、函館、幌泉、寿都、そして小樽の手宮の4港に海官所が設置された。手宮の海官所は間もなく海関所と改称して、南の勝



5万分1地形図「余市」「小樽」(明治42年部分修正)

納川周辺の信香町に移転した。

海官所が設置されると北前船は自由に小樽港に出入りできるようになった。小樽港は開拓使が設置された札幌の外港として重要な位置を占めるようになり、北海道西岸の中心港としての地位を確立した。道南の福山(松前)、江差などの有力な商人たちはどんどん小樽に移住していき、小樽は目覚ましく発展していった。

小樽港への出入り船舶が急増したため、明治4年、信香町の海関所裏の崖に常灯台が設置され、船乗りたちのランドマークとなった(図1)。常灯台は、水面上の高さ2丈6尺(約7.8m)、ガラス張りの威容を誇り、小樽の名物となったが、同7年5月に火事で焼失した。その後、同16年、より北に位置する祝津地区の高島岬に近代的な日和山灯台が建造され、石油ランプによって15海里(約28km)先までその光が届くようにな



図1：常灯台。明治4年、信香町の海関所裏の崖に建てられた。手前の有幌地区の海岸には磯舟が並ぶ。北海道大学蔵



図2：日和山灯台。昭和28年、現在の建物に改築。



図3：恵美須神社の船絵馬。明治30年3月2日、祝津村の金内亀治郎が奉納。



図4：恵美須神社本殿(文久3年・1863年築)



図5：「明治十三年 小樽港之図」(明治13年)。今村三峯筆。小樽市総合博物館蔵

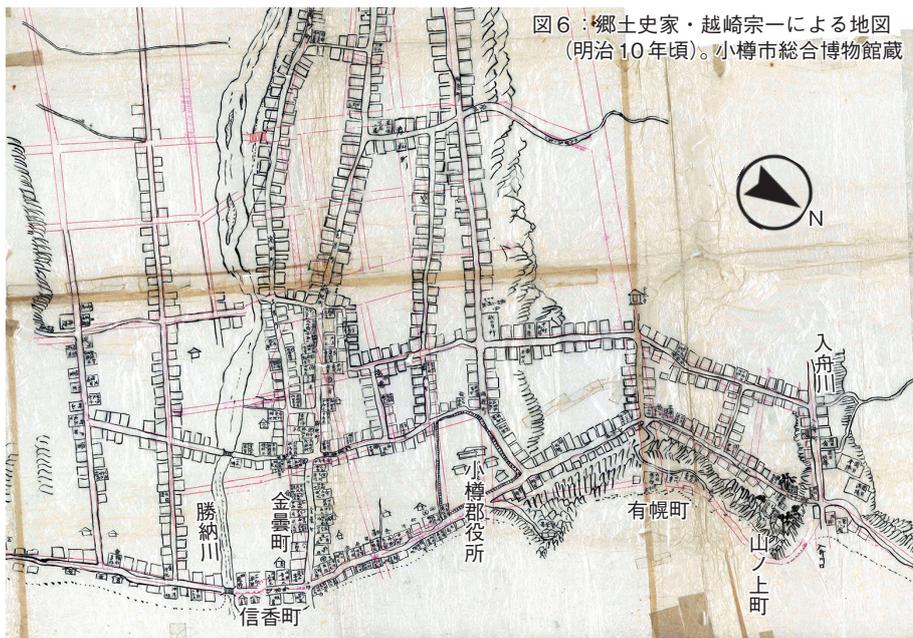


図6：郷土史家・越崎宗一による地図(明治10年頃)。小樽市総合博物館蔵

り、船乗りたちの航海をサポートした(図2)。祝津地区の恵美須神社には地元の船乗りたちが奉納した船絵馬が2面のこっており、北前船との関わりの深さをいまに伝える(図3・図4)。

◆勝納川流域の繁栄と北前船

勝納川沖には多数の北前船が来航し、この川の流域を中心に市街地が形成されていった。4月頃、上方や北陸・東北方面から米や味噌、酒、雑貨などの生活物資を満載した北前船が続々と来航し、積荷は伝馬船に積み替えられ、廻船問屋に届けられた。勝納川周辺の絵図(明治13年)から勝納川流域の信香町、金曇町周辺の繁栄ぶりが伺える(図5・図6)。

この絵図は潮見台の山頂から描いたもので、遠方には石狩から増毛

山、左手には手宮地区、高島岬が描かれ、小樽港を目指して入港してくる一枚帆の和船が数多く見える。小樽港内には帆を降ろして停泊している和船の他、複数帆を持つ西洋型帆船、合の子船が見られ、北前船交易には様々なタイプの船が用いられたことが伺える。手前の勝納川には大きな橋が架かり、ここから山ノ上の陰にみえる立岩まで、金曇町、信香町、有幌町の街並みが続く。郡役所の時の櫓が見えるが、信香町の常灯台はすでに焼失している。

北前船が入港してくると、船問屋では遠眼鏡で沖を見守り、自分の取扱船であることが判ると、角樽に酒を詰めて小船で出迎え、航海の無事を祝った。船頭は上陸の際には縞の羽織を着用し、伝馬船に乗り込み、返礼の米一俵と、染紋の紺地のゆた

ん(箆筒をカバーする布)をかけた船箆筒を積み込み、緋縮緬の裃一本の威勢の良い若衆の八丁櫓の掛声を背に上陸した。船頭は一番立派な座敷へ案内され、滞在中は一家総出でもてなされた。

勝納川北側の信香町は、当時、海沿いのエリアで、オタルナイ場所の拠点として運上屋が設置され、政庁の所在地として郡役所など様々な機関が集中するようになった。金曇町は、信香町と勝納町の間、勝納川北岸の細長いエリアで、安政4(1857)年にできた「コンタン小路」に由来し、明治3年に正式な町名となった。「コンタン」とは元々、売春婦やならず者たちの悪巧み(魂胆)から名付けられ、付近には早くから娼家、割烹店などが密集し、同4年には遊郭地に指定されている。北前船の船乗りたちと積荷の取引で繁栄を極めたこのエリアの光と陰を物語る。

しかし、明治14年5月21日夜、「日ノ屋」から発生した大火により、ほぼ全域が焼き尽くされ、同方面の家屋585戸が焼失してしまう。明治13年の鉄道開通の影響もあり、以後、繁栄は入船川以西に移っていった。

◆埋め立てによる造成地と北前船主の倉庫群

明治24年の小樽港の絵図は、明治中期以降、港町から色内・手宮にかけて埋め立てによって新しい造成地が出来ていった頃の小樽港と市街地の様子を克明に描いている。北前船は、勝納川沖からほぼ姿を消し、水天宮以西の手宮湾付近に集結するようになっており、小樽の市街地の変遷が伺える(図7)。

小樽が商港としての重要性が高まるにつれ、経済の発展、人口の急増により、新開地が必要となり、官民による海岸の埋め立てが盛んに行われるようになった。港町、堺町、色内町などは海産干場で、道路の際は

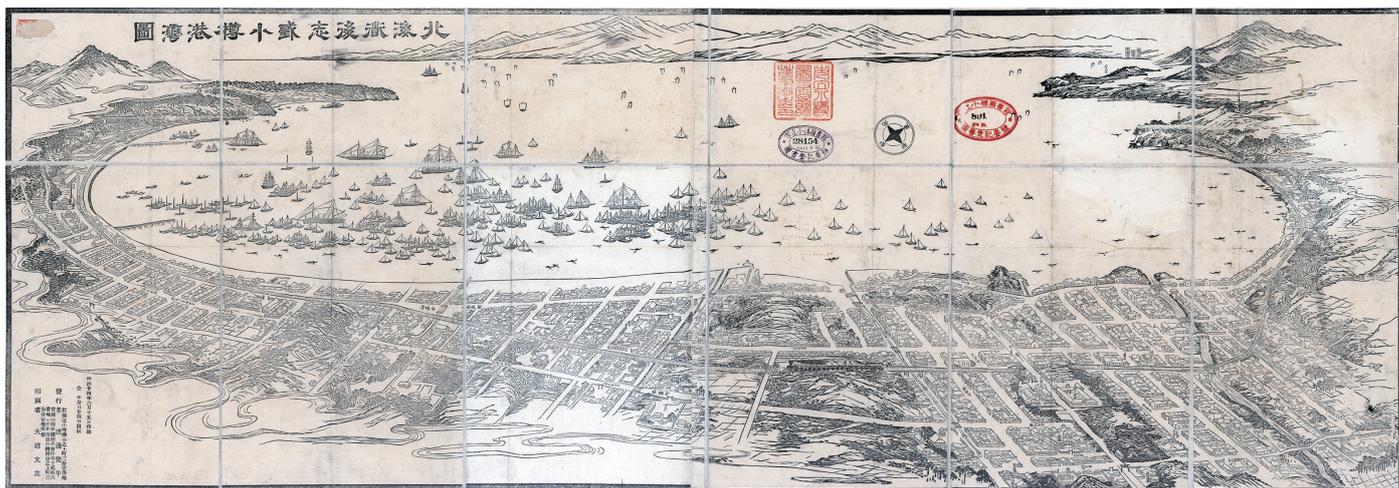


図7：「北海道後志国小樽港湾図」(明治24年)。右手の勝納川沖は船がまばらとなり、左手の手宮方面へ集中している様子が伺える。市立小樽図書館蔵

すぐ海になっていたが、埋め立てによって市街宅地となった。明治22年の埋め立てで造成された北浜町と南浜町の埋立地の譲受人には北陸の北前船主たちが多数含まれており、同20～30年代には倉庫や回漕店が数多く建てられていった。それらの倉庫のうち、5棟が「北前船」日本遺産の構成文化財に認定されている(図8～12)。

これらの倉庫は、北陸の北前船主たちの出身地の豪勢な邸宅とは異なり、シンプルな木骨石造の倉庫であるが、荷物の出し入れに適した機能性と、屋根の鯪、越屋根、モダンな二重アーチなど意匠が凝らされた魅力的なデザインとなっており、小樽の特徴的な景観を形成している。後年、北前船主たちの手を離れた後も、倉庫以外に博物館、物販店、イ

ベントスペースなど様々なかたちで活用され、小樽の重要な観光資源となっている。

旧小樽倉庫(明治23-27年築)、旧増田倉庫(明治36年築)は、それぞれ「北前船の里」で知られる橋立(石川県加賀市)出身の北前船主・西出孫左衛門と西谷庄八、増田又右衛門によって建造された。旧大家倉庫(明治24年築)と旧広海倉庫(明治22年築)は、瀬越(石川県加賀市)出身の大家七平、広海二三郎、旧右近倉庫(明治27年築)は河野(福井県南越前町)出身の右近権左衛門によって建てられ、北陸の北前船主たちと小樽が極めて深い関わりにあったことが伺える。

小樽に進出した北前船主たちは、明治以降、買積みによって地域間の価格差を利用して莫大な利益を上げ

る北前船交易が、汽船の登場、電信の発達などにより転換期を迎える中、営業倉庫、回漕業などのビジネスに進出し、新たな時代に対応して変化を遂げていった。倉庫群はそのことを示す象徴的な遺産で、他の寄港地にはない、小樽市の特徴的な構成文化財といえる。

小樽には、北前船主の豪勢な邸宅はなく、船中道具等もほとんど残っておらず、倉庫群の外観だけでは北前船との関わりはなかなか見えてこないが、絵図・地図、写真などによって北前船と小樽の市街地の変遷の関わりを知ることができる。ぜひ小樽に来て、本稿を手掛かりに北前船の遺産を辿ってほしい。

(参考文献)
高野宏康「小樽にのこる北前船の遺産」(『BYWAY 後志』第22号、2019年9月)
中西聡『北前船の近代史 海の豪商たちが遺したものの【増補版】』(2017年)
渡辺徳之助『小樽文化史』(1974年)
越崎宗一『新版 北前船考』(1972年)
『小樽市史』(第一巻:1958年、第二巻:1963年)



図8：旧小樽倉庫(明治23-27年築)



図9：旧大家倉庫(明治24年築)

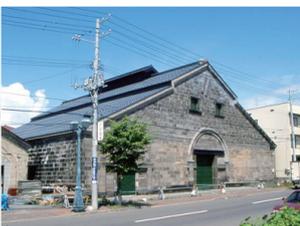


図10:旧増田倉庫(明治36年築) 図11:旧広海倉庫(明治22年築) 図12:旧右近倉庫(明治27年築)

高野 宏康

小樽商科大学 グローカル戦略推進センター学術研究員。博士(歴史民俗資料学)。1974年、「北前船の里」で知られる石川県加賀市橋立町生まれ。小樽市地域型日本遺産ストーリー検討WG委員、北前船子ども洋上セミナー実行委員会事務局長。おたる案内人マイスター。

